

『海賊』の典拠と主題: 『漁夫辞』と『土佐日記』

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村谷, 佳奈 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/32534 |

「海賊」の典拠と主題

——「漁父辞」と『土佐日記』——

村谷佳奈

はじめに

上田秋成『春雨物語』中の一篇「海賊」は、「紀貫之の『土佐日記』の世界を題材にとり、都への海路を行く貫之一行と、文屋秋津とされる海賊の邂逅を描いたものである。『土佐日記』では遭遇することのない海賊と貫之が対峙し、海賊の鋭い舌鋒によって政治、学問、和歌の在り方への批判が一方的に繰り広げられる。

そもそも「海賊」の物語は、『土佐日記』というテキストに規定されている。その点からも、『土佐日記』が「海賊」の構造を語るときに決して無視できない存在であるのは自明のことである。

しかし、「海賊」の典拠を、『土佐日記』のみに求めてもよいだろうか。まずもって、『土佐日記』中での海賊は、貫之一行にとつての脅威として語られるのみで、物語には実際に登場していない。そのため、『土佐日記』に海賊の人物造形についての典拠までを求めることは難しいだろう。海賊の正体を文屋秋津としている点から、

『春雨物語』中の他の物語（「血かたびら」「天津処女」）と同様に歴史小説という視点から捉えることも可能であろう。しかし「海賊」はあくまでも、『土佐日記』の世界を借りた虚構である。また、『続日本後紀』の歴史的記事が海賊のキャラクターに影響を及ぼしているという指摘も既にある。しかし、本来ならあり得ないはずの「海賊＝文屋秋津」という突飛な設定や、貫之と海賊が対峙するという本作の基本的な構図までを含めて説明し得る典拠とは成りえない。

もちろん、典拠を『土佐日記』や正史の記述以外のものに求めている説も存在する。原道生氏は、秋成が浄瑠璃「小野道風青柳硯」に登場する文屋秋津をもとにした可能性を指摘されている¹⁾。それについては飯倉洋一氏や井上泰至氏も論文の中で触れている。また、坂井與氏は「海賊」の典拠を、都賀庭鐘『英草紙』の「豊原兼秋音を聴て国の盛衰を知る話」に拠ったものである可能性を示唆している²⁾。しかし、どの説に挙げられている作品も、本作がなぜ貫之と海賊を対峙させたのか、という基礎的な構図を理解するための典拠としてはやや物足りない。

本稿では、「海賊」の典拠を、海賊が退去する場面における「舷た、いてうたふ」という表現に注目し、それが屈原作「漁父辞」に基づいていることを指摘した上で、さらにそれが物語の基礎的な構図を読み解く鍵でもあるのではないかと、という推論を示す。そしてその上で、改めて『土佐日記』と「漁父辞」の両作品に基づいて「海賊」の内容を検討し、「海賊」という物語の主題について考察する。

一、天理冊子本と「滄浪歌」

まず、『春雨物語』の稿本について整理しておく。この作品は写本のみで伝わっており、現存している諸本は、天理卷子本、天理冊子本、佐藤本（『春雨草子』）、富岡本、文化五年本の五種であり、そのうち「海賊」を収録するものは天理冊子本・富岡本・文化五年本である。三種の中で天理冊子本は、断簡をまとめたものという性質もあり、「海賊」に関しては後半部分の「こたへあらは承らん……」以下の箇所に通りのテキストが存在している。ここでは便宜上、中央公論社版『上田秋成全集』第八巻の三〇一頁一〇行目から三〇二頁六行目までの部分を天理冊子本A、三〇二頁七行目から三〇三頁九行目までの部分を天理冊子本Bとする。「海賊」についての議論は、完成されたテキストを持つということもあり、従来富岡本と文化五年本の比較において論じられることが多かった。しかし、天理冊子本は不完全な形ながらも、「海賊」の典拠について考察する上で非常に重要と思われる部分がある。それが明らかなのは、海賊が退去する場面である。以下に三種の稿本における当該箇

所を示す。

《文化五年本》おのが舟に飛うつりて、やんら目出たのと舷た、いてうたふ。

《富岡本》おのか舟に飛うつり、舷た、いて、やんらめてたと声たかくうたふ。

《天理冊子本A》舷をた、いて、滄浪は我足す、く盃也、纓は我かうふりし麻苧の乱なりとて、

《天理冊子本B》舷をた、いて、滄浪も我盃也、纓は我かうふりし麻苧の乱よとて、

右の通り、天理冊子本A・Bは似通っているものの、文化五年本・富岡本と比較して明らかに異なっていることがわかる。三種の稿本全てで、波線部「舷をた、いて」という動作については共通しているが、波線部に注目すると、文化五年本と富岡本では「やんらめてたと」と歌っているのに対し、天理冊子本では漢詩の一節のような歌を詠じている。文化五年本、富岡本での表現については、近世の船歌を利用したとの指摘がなされているが⁷、天理冊子本A・Bの表現はそれとは趣を異にする。

では、天理冊子本における当該箇所の表現は何に由来するものなのであるうか。先に結論を述べておけば、天理冊子本A・Bにおける波線部の表現は、屈原作「漁父辞」の一節を用いたものであると考えられる。「漁父辞」の中で、中央を追われて来た屈原に対し、漁父が世の清濁に応じて生きること、濁世を避ける必要などないこ

とを歌いながら説く箇所がある。この部分は俗に「滄浪歌」と呼ばれており、引用すると、

滄浪之水清兮 可以濯吾纓 滄浪之水濁兮 可以濯吾足

とあり、「滄浪」や「纓」などの単語が共通していることから、天理冊子本の表現がこの部分を踏まえたものであることは間違いない。ただし、屈原の「漁父辞」は、漢文の名作として名高いものであるため、いくつかの書物に収録されている。そこで、次節では秋成がどのような書物に拠って「漁父辞」を参照したのかを考察してゆく。

二、「古文真宝」所収「漁父辞」における

「鼓泄」の訓と注釈

秋成が「漁父辞」を読む際に用いた書物について検討する前に、日本において「漁父辞」がどのように扱われてきたかを簡単に確認したい。「漁父辞」は、「楚辞」「史记」「文選」「蒙求」などといった多数の書物に収録され、古くから日本の文学に多大な影響を与えてきたことはよく知られている。官吏にとって漢籍の教養が必須であった中古から、様々に評価を受けつつも、「漁父辞」、そして作者とされる屈原の物語は広く受容されてきた。

そうした状況で、「漁父辞」を収録する書物として近世に最も流布していたと考えられるのは『古文真宝』である。これは中国で成り立した書物で、前集、後集からなる漢詩文集であり、前集は漢から南宋までの漢詩集、後集は北宋までの漢文集である。日本では室町

時代に五山の禅僧たちによって五山版が作られて以降普及したとされる。特に「漁父辞」が収められている後集は、手軽に名文が読めるものとして、近世においては特に需要が高かった。人気商品であったため、多くの書肆によって、傍訓本、無注本、付注本など各種の版本が作られ、その種類の多さは現在残っている版本の数をみても明らかである¹⁰。

『古文真宝』には多種多様の版本が存在するが、その多くの版本の内題に「魁本大字諸儒箋解古文真宝」とある。これは一般に「諸儒箋解本」と言われ、中国の元・明版で原著が注付きのものである。日本での『古文真宝』普及の原点と考えられている五山版もそれを踏襲していたため、近世期に入っている版本も多くはこの「諸儒箋解本」の注を受け継いだ付注本であった。また、近世には林羅山諺解・鶴飼石齋校注『古文真宝後集諺解大成』（寛文三年刊）、毛利貞齋『古文真宝後集合解評林』（延宝七年刊）など、日本の儒者たちによって様々な注釈付のものも作られている。しかし、それらも「諸儒箋解本」の注を基本的には受け継いでおり、新しい注釈はその上にさらに付け加えられていった。

もちろん、前述したように「漁父辞」自体は様々な書物に収められている。そのため秋成がどの書物によって「漁父辞」を参照していたのかを特定することは難しい。しかし、後述するように秋成の「漁父辞」理解は「諸儒箋解本」の注に沿ったものであると考えられる。また、近世における『古文真宝』後集の流布状況を考えると、秋成が『古文真宝』の注釈とあわせて「漁父辞」を参照していた可能性は非常に高い。よって、本稿では『古文真宝』に限って調査を

進めることにした。

以下、今回調査できた『古文真宝』の版本を挙げる¹¹⁾。ただし、調査の範囲は第一に比較的流布していたもの、第二に秋成の生前の刊行のもの、という二つの限定を行っている。(刊行年代順)

- ① 金沢市立玉川図書館近世資料館蔵 寛文元年風月庄左衛門刊本
- ② 同蔵 寛文五年武村三郎兵衛刊本
- ③ 架蔵 寛文十年山田市郎兵衛刊本
- ④ 金沢大学付属図書館蔵 延宝七年弘章堂山本長兵衛刊本
- ⑤ 石川県立図書館蔵 元禄七年山口屋権兵衛刊本 ※無注附訓本
- ⑥ 早稲田大学図書館蔵 元文五年長村半兵衛・河南四郎兵衛刊本
(古典籍総合データベースで閲覧)
- ⑦ 石川県立図書館蔵 宝暦九年梅林三郎兵衛刊本
- ⑧ 一戸渉氏蔵 寛政九年丁巳補刻大坂書林北尾善七刊本 ※⑤を改題し絵を増補したもの。

ここで、第二節において諸本全てに共通していることが確認された波線部「舷た、いて」という表現に着目する。「漁父辞」本文で「滄浪歌」の直前部分を確認すると、

漁父莞爾而笑 鼓柁而去 乃歌曰

とある。つまり漁父は、にっこりと笑い「鼓柁」して「滄浪歌」を歌いながら去ってゆくのである。

この「鼓柁」についての解釈は、①の寛文元年風月庄左衛門版『古文真宝』に基づいて、そこに付された注を参照すると、「柁ヲ鼓ク

トハ舷舷ヲ扣クナリ」(原漢文)とある。この表現は、波線部「舷た、いて」という海賊の動作と共通している。このことから、天理冊子本A・Bにおける「滄浪歌」の利用に加え、その前の動作も「漁父辞」に依拠していることがわかる。

「柁ヲ鼓ハ舷舷ヲ扣ク也」という注は、⑤と⑧の無注付訓本を除いて、先に掲げた『古文真宝』のすべてに見られた。これは「諸儒箋解本」にもともと備わっていた注であると考えられる¹²⁾。そのため、これらの近世版本に同一の注が見られるのは当然のことであるが、更にこれらの版本を詳しく見ると、⑤・⑧には「柁」に「フナハタ」との傍訓があり、また、①・③・⑦の版本でも「柁」の下に「タ」と記されている。これらはいずれも「柁」を「フナバタ」、すなわち船のへりと理解した上での訓である。無注付訓本では削られているが、これらも「諸儒箋解本」における漢文注に基づいた共通理解を示しているといえる。「海賊」での「舷」も、恐らくこの注の「舷舷」の一字を用いたものと考えられるため、『古文真宝』諸本の訓と同様、「フナバタ」と読むべきであろう。

以上より、今回調査できた限りにおいて、近世の『古文真宝』各種版本における「鼓柁」の解釈は一定であり、それらは「海賊」での海賊の動作とも極めて近いものということが明らかになった。このことから、「漁父辞」そのもののみならず、注釈の内容も「海賊」の本文に利用されていることが確認できる。だが、これは単なる字句の一致だけにとどまらない。

三、「海賊」における引用の意圖と隠蔽

海賊が退去する場面において、秋成が「漁父辞」の表現を用いた意圖はなんであろうか。それについて考えるために、まず天理冊子本A・Bにおける傍線部の文意について考察する。

「滄浪は我足す、く盥也」という表現は、「漁父辞」での「滄浪之水濁兮 可以濯吾足」に対応していると考えられるが、「漁父辞」で問題となっている「滄浪」の清濁については全く触れられておらず、海賊は「滄浪」を単に自分の足を洗うたらいだと見なしている。また、続く「纓は我かうふりし麻苧の乱なり」という部分では、自分にとって「纓」は「麻苧の乱」であると述べている。「纓」とは、「古文真宝」の注には「纓ハ冠ノ素ナリ」（原漢文）とあり、冠の紐をさすとされる。対して「麻苧」とは一般に麻、または麻糸を指す語であるが、秋成は「ぬば玉の巻」（安永八年序）で、

つらつら今の世のありさまを見聞くに、天のしたの乱れ、あざ^{あざ}芋の糸口うしなへるに似て。いにしへよりためしすくなく。大君のしづもりませる都の内さへ。つるぎ打ふり。弓ずゑふりたて、。（傍線論者）

と記しており、世の乱れた状態をたとえる際に「麻苧」という語を用いている。このことから、海賊のいう「麻苧の乱」もこうした意味合いを含むものと捉える余地があるが、仮にそうであったとしても、文意は掴みたい。しかし、「我かうふりし」とあることから、秋成は本来冠の紐を指している「纓」を、冠全体を指すものとして

理解していたのかも知れない。とはいえ、その「麻苧の乱」を歌う海賊の姿は、この直前に「滄浪」を「我足す、く盥」であると誇らしげに語る姿と近いものと考えるのが妥当と思われる。従って、この部分は官人の高貴さの証である冠の紐も、海賊の被っているものは、どうしようもなく乱れてしまっているのだ、と原典の「滄浪歌」とは対比的な表現を用いたものと考えられる。

そもそも、漁父の歌う「滄浪歌」は、あくまで屈原に対して清濁に応じた官人としての生き方を説くものであった。それに対し、海賊の歌は、「滄浪歌」の表現を用いてはいるものの、決して貫之に教示するわけではなく、単に海賊自身の生き方を一方的に主張するものとなっている。海賊は、作中の末尾近くで、「放蕩乱行にして、ついに追はられれしか、海賊となりてあふれあるくよ」（富岡本）と、貫之の友人に語られている。ここでは、「滄浪歌」の表現が用いられることによつて、世の清濁にも動じず、身分も気にしない海賊の現在の生きざまがむしろ効果的に表現されているといえる。「漁父辞」の表現を転用・俗化したことで、富岡本で海賊が自ら述べているとおり、「文よむことを好む彼の素養の高さを示しているといえる。また同時に、漢籍の名文を自己のそうした立場を語るための手段に転用してしまうという、海賊の「放蕩乱行」な性格設定を反映したものと理解できる。

しかし、天理冊子本A・Bにおける傍線部の表現は、第一節で確認したとおり、富岡本と文化五年本では「やんらめだ」という表現に置き換えられてしまっている。「やんらめだ」は先行研究でも指摘があるように、近世船歌調の表現であり、明らかに俗謡風で

ある。その点は、「滄浪歌」を転用し俗化した天理冊子本の表現と共通しているが、これは漢文を利用した前者に対して、明らかに和風の表現であり、ここで秋成は表現の和風化を行っているといえる。この変化によって、退去の場面の典拠が「漁父辞」であることはテキストの前面に現れないことになり、結果として、典拠との関係が隠蔽されたものと捉えられる。その隠蔽の理由については、次節以下で順を追って検討してゆく。

四、「漁父辞」から読む海賊

海賊の退去の場面について、「漁父辞」の本文と『古文真宝』後集の注がそれぞれ表現の典拠となっていることはこれまで確認したとおりである。

海賊が退去した後、その正体が文屋秋津であることは貫之の友によって明かされる。海賊の正体がなぜ文屋秋津であるのかということについては、はじめに述べたように様々な可能性が指摘されてきた。しかし、ここではなぜ「海賊」秋津」という設定にする必要があったのか、ということに着目して考えてみたい。海賊の存在自体が『土佐日記』の本文を用いた設定であるの言うまでもないことだが、なぜ海賊に正体が必要であったのか。

改めて本作における貫之と海賊の対峙の構図について考えてみると、ここで対峙する両者の姿は、「漁父辞」において対峙している屈原と漁父の姿と様々に共通した点が認められる。ここで一度、両作品の流れを簡単に追ってみることにする。

「漁父辞」では、

- ① 追放された屈原が沼沢地の淵で漁父と出会う。
- ② 屈原の境遇の話から、処世態度についての問答に発展する。
- ③ 「举世皆濁 我独清」と、世俗と相容れないことを嘆く屈原に対し、漁父はその嘆きを諫めるが、屈原はそれを頑として受け入れない。

④ 結局二人の問答は物別れに終わり、漁父は「滄浪歌」を歌って去り、「遂去不復與言」とあるように、二度とやりあうことはなかった。

一方「海賊」では、

- ① 土佐守の任が終わり都への海路をゆく貫之を海賊が追っつけて対面を果たす。
- ② 海賊は貫之の古今和歌集仮名序をはじめ、延喜の聖代など様々なものを批判する。
- ③ 意見をし終えた海賊が「物とへ、猶云ん」（富岡本）と促すも、貫之は何一つ反論しない。
- ④ 飽きるまで飲み食いした海賊は、自らの舟に戻り歌を歌って、「後しら波とそなりにけえり」（文化五年本）とあるように、どこへとも知れず立ち去る。
- ⑤ 都へ戻った貫之のもとに海賊から「昔相公論」が届く。海賊の正体は貫之の友人によって「それはふん屋の秋津なるへし」（文化五年本）と指摘される。

④に挙げた歌と退去の場面については、第一節や第三節で確認したとおりである。また、③で貫之が海賊に対し全く意見を述べない

ことを、議論の余地もないほど相容れぬゆえだと考えるならば、両者の意見が決裂するという点でも「海賊」は「漁父辞」と共通しているといえる。

更に、「古文真宝」所収「漁父辞」の注の記述に、海賊の性格設定を考える上で、重要と思われるものがある。それは「漁父辞」の題の部分に続けて記されている次の一節である。

漁父蓋亦當時隱遁之士。

つまり、「古文真宝」の注において、漁父は単なる漁師ではなく、元は中央で活躍していたが、何らかの理由で職位を追われた隠者であると解釈されているのである。

一方、「海賊」の本文中には、海賊が自らの境遇について述べる場面があり、

《富岡本》我は詩つくり歌よまされと、文よむ事を好みて、人
にはほりにくまれ、遂に酒のみたれに罪かうふり、追やらはれ
し後は、海にうかひわたらひす、

《文化五年本》我は詩つくらす歌よまねと思にはほりて人にね
たまれ、且酒に乱て罪かうふり、追やられしのは、力童ある
をたのみて、海にうかひ賊をなし、

というように、海賊は自身が学問に長けていたことを誇ったために反感を買って、遂には追放されたという経歴を語っている。つまり、海賊もまた「隱遁之士」であったわけである。こうしたことを考えると、「古文真宝」の注が海賊の人物造形へも影響を与えている可能性が高い。

ところで、海賊の正体は、前述したように「海賊」の末尾付近で

文屋秋津だと明かされている。『続日本後紀』に載る文屋秋津の卒
伝は、中村幸彦氏の指摘¹³⁾をはじめ、先行研究でも度々参照されて
いるが、改めてここで引用しておく。

出雲權守正四位下文室朝臣秋津卒。大納言正二位智努王之孫。

從四位下勲三等大原王之第四子也。弘仁七年叙從五位下。明年

除甲斐守。後任武藏介。天長之初。補左兵衛權佐。(中略)十

年兼春宮大夫。承和元年上表。乞停左大弁左近衛中将等職。勅

停左大弁。二年遷右近衛中将。七月。任右衛門督。觀察非違。

最是其人也。亦論武芸。足稱驍將。但在飲酒席。似非丈夫。每

至三四杯。必有醉泣之癖故也。九年秋七月。連坐伴健家謀反事。

左降出雲員外守。遂終于配処。時年五十七。

卒伝の中の「驍將」や「醉泣之癖」といった表現が、海賊の人物造形に影響を与えているという指摘がある。15 一方で、秋津は承和の人物であり、貫之とは百年ほど時代に開きがあるということから、海賊の正体がなぜ秋津である必要があったのかについては、先行研究でも未だ解決できない問題として指摘されている。それらの指摘に対する解答となるには物足りないが、これまで述べてきたように秋成が「古文真宝」の注を参照していたと考えるならば、海賊の正体を漁父と同様に隱遁の士、つまり中央を追放された人物として設定した可能性は十分にある。検討すべき点は未だ多いが、まず秋津が中央から追放された人物であったことが、「海賊」文屋秋津」となるに至った一因であったのではないだろうか。

では、その海賊と対峙する貫之は、「漁父辞」における屈原の立場をなぞらえるに足る人物だろうか。これについては、近世期にお

ける『土佐日記』、そして貫之がどのように認識されていたかについて考える必要がある。

『土佐日記』研究の世界において、貫之の土佐守任命を一種の左遷であるとする見方は少なくとも秋成よりも少し下った時代には確認することができる。富士谷御杖は『土佐日記燈』（文化十四年成立）¹⁶の中で、

これ（『土佐日記』・論者注）必ふかきいきとほりありてか、れたる物なりとは明らかなるなり。（中略）罪人を配せらる、處なれば心よからさりしかうえにおもひかけぬ人大国上国に任せらる、も有ければ土佐の任をふかくはちられけることおもひやられたり

と述べている。このように捉えるならば、貫之の立場を屈原に重ねる見方も一応は可能である。

秋成自身は加藤宇万伎の『土佐日記解（明和五年年跋）』を訂正浄書した際に付けた序文¹⁷において、『土佐日記』の執筆理由について考察している。以下に引用すると、

此記のなれる故は、貫之土佐の国の任みちてかへる年に、いとかなしくせし子のやまひして死たりしを、あかすなけきをしまれたるか、さすがに人目のめ、しさを恥らひて、女ふみのさまに書れし也と云はざるものから、…もろこし人のかさりいつはれるふみのさまをよき事として、下の情はあらはさず、夫婦は別有へき教へをむねとしつ、是をなん、ますら男心そここ、ろえしかは、次々の世は、必しかのみ事行なひ、文をも哥をも打まねふ事と成ぬれと、実のこ、ろはしかあらざりき。この記

もその世のならひして、かなし子の事悔るは、男たましひもなきそと人の思はんをやさしみて、をんなのかけるさまにうつしなされたりけるものか。

と、秋成は、貫之が子を失った悲しみを女性に仮託した日記へ記すことで慰めとしたのであらうと推察している。しかし、土佐守任命については触れておらず、秋成がこれを左遷と捉えていたかどうかについては不明である。だが、秋成と御杖とはほぼ同時代に生きた上方の学者で、共通の知人も少なくない。憶測であることを承知で言えば、貫之の土佐守任命についての見解について共通する部分があったのではないだろうか。だが、仮に秋成がそうした見方をしていなかったにしても、貫之と海賊、屈原と漁父とが、どちらも中央から離れた土地において、官人としてのあり方について議論を行うという、両作品の基礎的な構図の一致は、明白であるといえる。

ここまでの比較で、「漁父辞」が単に海賊の退去する場面のみならず、「海賊」の物語全体の基本的な構図として用いられていることを確認してきた。しかし、天理冊子本から富岡本、文化五年本への改変に伴い「漁父辞」を転用した表現が隠蔽されていることは、第三節で指摘したとおりである。これは言い換えれば、明示的な典拠を『土佐日記』に一本化しているということである。だとすれば、『海賊』という物語の成立過程において、秋成が『土佐日記』と、今回新たに構図の典拠として指摘した「漁父辞」を、どのように融合させ、読み換えているのかを考える必要がある。以上より、これまで「漁父辞」と「海賊」の関係のみに言及してきたが、次節では『土佐日記』に起因する点も含めて検討することで「海賊」とい

う作品の主題について考察する。

五、海賊と「貫之」秋成は典拠をどう読み変えたか

「海賊」と「漁父辞」全体における構図の共通点については、これまで述べてきたとおりである。しかし、より細かい点を比較すると、両作品には大きな相違点があるといえる。それについて、次に「漁父辞」と「海賊」の冒頭付近を引用しながら具体的に示す。まず「漁父辞」では、

屈原既放 游於江潭 行吟澤畔 顏色憔悴 形容枯槁
とあるように、屈原が左遷され、失意のうちに沼沢地をさまよっている様が述べられている。

一方で、「海賊」では、

紀の朝臣つらゆき、土佐の守の任はて、十二月のその日、都にまう登りたまふ。国人のしたしかりしかりは、なごりを、しむ。民くさは、昔より聞しらぬ守そとて、父母に泣子のさましてしたひなけく。出ふねの、ちも、こ、かしこにおひれて、酒、よきものさ、けきて、歌よみかはすへくす。(文化五年本)

と、「土佐日記」の本文と同様に、貫之が土佐の人々に惜しまれ、盛大に見送られている様が描写されている。

前節では、富士谷御杖の説を引いて、貫之の土佐守任命を左遷と捉える見方が当時において存在していたことを示した。しかし、「土佐日記」は、あくまでも都への帰還の道のりを描いたものである。

それが仮に左遷への憂いから書かれたものであったにせよ、「土佐日記」、そして「海賊」に描かれている貫之は、都へ帰還する者なのである。この点に注目すると、貫之の立場は、左遷されてさまよう屈原とは対極にあるといえる。つまり、屈原と貫之には、実は都へ戻れない者と戻ることができる者という決定的な立場の違いが存在するのである。そして、この差異は「海賊」の主題について考察するために重要な点であると考えられる。そこで、貫之と屈原の差異を明らかにした上で、再び「漁父辞」と「海賊」における対峙の場面について考えてみたい。

両作品における議論の内容に注目すると、「漁父辞」では、漁父はあくまでも屈原に生き方を教示しているということがわかる。第三節で述べたように、漁父を隠遁の士と見るならば、中央を追放された者同士、この両者の立場はほぼ同じだといえる。

対して「海賊」における貫之と海賊の関係は、都へ戻る者と戻れない者という対立関係にあるといえる。海賊の正体は前述したように文屋秋津であり、正史の上では彼もまた、屈原のように、不遇のうちに都へ戻れなかつた者の一人であった。その点を踏まえると、海賊が貫之と中央に対し執拗に批判を繰り返すのも、貫之がそれに全くといってよいほど反論しないのも、両者の立場の違いに起因するものと考えられるのではないだろうか。

海賊が貫之に対し批判する内容は、貫之を中心に編纂された『古今和歌集』仮名序に始まり、延喜の聖代や意見封事などにまで及ぶ。しかし、学問にせよ政治にせよ、それらはいずれも中央に帰する問題である。海賊の執拗な批判は、もちろん貫之個人にも向けられて

はいるものの、その先にある都や中央の政治を見据えたものであることは明らかである。貫之と海賊の立場の違いを踏まえると、この海賊の批判は、彼の自己主張のみのために行われるものではなく、辺境に追放された多くの政治的敗者たちの代弁でもあるとも考えられる。

この両者の立場の違いは、「海賊」の文脈においては自明のことではあるのだが、「漁父辞」と『土佐日記』という二つの典拠と本作を比較検討することによって、より鮮明に浮かびあがってくるのである。

以上のことから、「海賊」の物語は「漁父辞」の対立構図を全体の下敷きにしてはいるものの、その主題は「漁父辞」とも、物語を規定する『土佐日記』とも異なったものであったといえる。「漁父辞」で描かれた、都を追放された者同士の議論は、「海賊」においては追放された者から都へ戻る者への批判という形に変化して使われたといえる。『土佐日記』に加え、「漁父辞」とも比較検討することによって、都へ戻る者として貫之が描かれていることの意味がより鮮明になり、海賊が執拗に貫之に批判を述べる構図を理解することが可能になるのである。

富岡本や文化五年本において「漁父辞」の表現が隠されたのは、あくまで『土佐日記』の世界を舞台とすることが必要だったためであろう。その上で『土佐日記』の本筋から逸脱し、貫之と海賊が出会うことこそ「海賊」の物語の原点である。また、「漁父辞」の表現を具体的に用いることで、安易に「漁父辞」の構図を『土佐日記』の世界に転用しただけの作品であると捉えられてしまうことを懸念

したためであったかもしれない。そう考えると、「漁父辞」の隠蔽は、本作にとって必然の結果だったのでないだろうか。

『土佐日記』の世界を題材とする本作を、『土佐日記』との密接な関わりを意識せず読むことは出来ない。しかし、『土佐日記』や正史の記述のみに基づいて読んでいては、貫之と海賊の対峙の典拠や、海賊に正体が必要であった理由についてまで理解することは難しい。それらは「漁父辞」という、構図の典拠を参照してより鮮明になるのである。『土佐日記』と「漁父辞」という名高いテクストの持つ物語の型を用いつつ、そこから逸脱していくことによって、秋成は典拠とは異なる新しい物語を生成しているといえるのである。

おわりに

以上、本稿では、「海賊」の典拠が屈原作「漁父辞」にある事実を指摘し、さらにそれに基づいて「海賊」という物語全体の基礎的な構図を読み解くことを試みた。その過程で、秋成が「漁父辞」を何に拠って参照したかという問題について、「眩た、いて」という表現に着目し、『古文真宝』後集の注も「海賊」の本文に影響を与えていることを示した。そして「漁父辞」と「海賊」の共通点を検討した上で、改めて『土佐日記』と「漁父辞」の両者に基づいて「海賊」を読解し、本作が都へ戻れなかった者と、戻る者との対峙というテーマを描いたものではないかという指摘を行った。特に、貫之と海賊が対峙する場面の構図は、『土佐日記』のみでは決して導き出すことができないものである。また、貫之が都へ戻る者であると

いう、失念されがちな事実については、「漁父辞」における屈原と貫之の状況を比較検討することによって、海賊との立場の違いがよく鮮明に浮かび上がるといえる。しかし、歴史上の追放された者たちの中でなぜ文屋秋津が海賊の正体として選ばれたのかという点や、秋成が貫之の土佐守就任をどう捉えていたかという点など、触れられなかった問題も多い。本稿は、ひとまず「海賊」における典拠と主題について一定の解釈を示したものである。

(注)

- 1 日本古典文学大系56『上田秋成集』(中村幸彦氏校注、岩波書店、昭和三十四年)三九三頁、補注四七。
- 2 叢書江戸文庫14『近松半二浄瑠璃集 一』(校訂代表 原道生氏) 解題。
- 3 飯倉洋一氏「海賊」考(『秋成考』、翰林書房、平成十七年二月、初出『江戸時代文学誌』第六号、一九八九年三月)
- 4 井上泰至氏「春雨物語」「海賊」の文屋秋津(『雨月物語論』、笠間書院、平成十一年年四月、初出『緑聖文芸』二〇号、平成元年三月)
- 5 坂井與氏「海賊」の典拠(『国学院雑誌』第六十二卷一、昭和三十六年一月)
- 6 以下、秋成の著述の引用は、特に注記しない限り全て中央公論社版全集による。
- 7 飯倉洋一氏、前掲論文。
- 8 本稿における「漁父辞」の引用は、後述の通り秋成が「漁父辞」

を「古文真宝」で確認した可能性を考え、全て金沢市立図書館蔵寛文元年風月正左衛門版『古文真宝』によった。

9 石破洋氏「屈原とその文学」わが国における評価(『金沢大学国語国文』第六号、昭和五十三年三月)に詳しい。

10 これについては林望氏「書誌学の回廊」(日本経済新聞社、平成七年)所収の「古文真宝なる顔つき」に詳しい。

11 これらは近世期に刊行された『古文真宝』の版本のごく一部に過ぎない。だが、本稿では『古文真宝』における「漁父辞」の訓と注釈の大勢を問題としており、以下に検討するように、その点について各本で大きな差異はない。

12 以下、『古文真宝』からの引用は、特に断らない限り、全て付注本に共通して備わる「諸備箋解本」の注である。

13 注1に同じ。

14 新訂増補国史大系3『日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録』(吉川弘文館、昭和四十一年)

15 勝倉壽一氏「春雨物語」「海賊」論の基礎—その造型性と批判精神をめぐる—(『国語と国文学』第六十四卷十号、昭和六十二年十月)

16 『土佐日記燈』(國光社、明治三十一年)の翻刻に基づく。

17 一戸涉氏「秋成と『土佐日記』——『海賊』論のために——」(『国語と国文学』第八十六卷第十二号、平成二十一年十二月)が紹介する天理図書館所蔵の秋成自筆本より引用。

【付記】本稿の執筆にあたり、一戸涉氏の御指導を頂きました。記して感謝する次第です。